

第6章 日本語力が英語力を決める

前章では英語の基本型が「セン (マル) セン」であることを学びました。また、この基本型から、どのようにして「There (ある (いる)) ABC」という文が生まれるのかを示しました。

そこで、この章では、英語の基本型が「セン (マル) セン」であることを、引き続き次の英訳に挑戦することによって、もう一度、確かめてみることにします。

英訳の対象となっているイソップ物語(改作版)は次のようなものでした。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。

さて、「むかし羊飼の子供がいた。」の英訳は既に終わっていますので、次の対象は「いつも次のような悪さをした。」という文です。この和文の各々に対応する英訳は次のとおりです。

[いつも] 次のような悪さを (した)。

[always] the following trick (played)

< trick : 悪さ、悪^{いたずら}戯、計略、トリック >

これを英語の基本型「セン (マル) セン」に変換しなければならないのですが、しかし、ここで困ったことが一つあります。それは「マル」の前後に「セン」を置こうにも、「セン」が一つしかないからです。ではどうすればよいのでしょうか。

既に前章で調べたように、「セン (マル) セン」は、意味上から言うと、「動作主 (動詞) 動作の対象」が基本的な意味でした。そこで、もう一度、「いつも次のような悪さをした。」という文を調

べてみます。さて、この下線部は「動作主」でしょうか。それとも「動作の対象」でしょうか。

その答えは明らかです。というのは、日本語では、助詞「を」は「動作の対象」を表し、助詞「が(は)」は「動作主」を表すのが普通だからです。つまり、「次のような悪さ」が「マル」の後の「セン」になるわけです。では「動作主」つまり「(悪さを)した」のは誰でしょうか。もちろん、それは「羊飼いの子ども」ですね。以上のことを図示すると次のようになります。

[いつも] その羊飼いの子ども (した)

次のような悪さ

[always] the shepherd's boy (played)

the following trick

このように、日本語では、文脈で分かっている「動作主」=「主語」は、省略するのが普通なのです。その証拠に、上記の話の続きを見てください。下線部の「動作主」=「主語」が全く表現されていないにもかかわらず、日本語として不自然さだと、誰も思わないのではないのでしょうか。「主語」をいちいち書いたりすると、むしろ不自然な日本語になるでしょう。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。・・・

ところが英語では特別な場合を除いて絶対に主語を省略することはありません。省略すると通じない英語になってしまいます。なぜなら英語の基本型「セン (マル) セン」は絶対に崩すことのできない原則だからです。そこで上記のように「主語」として「(その)羊飼いの少年」を補わなければならないのです。

その羊飼いの子ども (した) 次のような悪さ

[いつも]

しかし、ここでもう一つ問題が出てきます。というのは、日本語では文脈で分かっている既知の情報(旧情報)をいちいち表現しないのと同じよ

うに、実は英米人も旧情報をいちいち表現するのを煩わしく感じています。そこで毎回、「その羊飼いの子ども」と書かなくてもよい方法を考え出しました。それは「その羊飼いの子ども」という名詞の代わりになる簡便な語 = 「彼」を使う方法です。

形式語 (いた) 羊飼いの子供 [むかし]

新情報

旧情報

その羊飼いの子ども = 彼

(した) 次のような悪さ

[いつも]

このような「名詞の代用語」を「代名詞」というのですが、上記の場合、男を指すので「彼」と言い、英語では「he」という語で表し、他方、女の場合は「彼女」と言い、「she」で表します。これらは一般に人間を指すことが多いので、まとめて「人称代名詞」と呼んでいます。人称代名詞には人間以外を指す言葉(it)もあるのですが、ここでは説明を省略します。あとで詳しく説明する機会があると思います。

さて、こうして「その羊飼いの子ども」を「彼」に置き換えて、英単語を「セン (マル) セン」の語順に並べると下記ようになります。ただし、「時間」を表す語句は、英語では文頭または文末に来ることが多いので、ここでは「セン (マル) セン」の構造が分かりやすくなるように、文頭に置いてあります。

[むかし] 形式語 (いた) 羊飼いの子供

[once] there (was) a shepherd's boy

彼 (した) 次のような悪さ [いつも]

he (played) the following trick [always]

以上で十分に通じる英語になったのですが、英

語では「いつも」「しばしば」「ときどき」「滅多に」「決して」という副詞(= 「頻度の副詞」)は、不思議なことに他のものとは違って、動詞の前に来るという変わった習性を持っています。たとえば次の例文を見てください。

He always tells a lie. 「彼はいつも嘘をつく」

He often tells a lie. 「彼はしばしば嘘をつく」

He sometimes tells a lie. 「彼はときどき嘘をつく」

He seldom tells a lie. 「彼は滅多に嘘をつかない」

He never tells a lie. 「彼は決して嘘をつかない」

ですから「彼はいつも次のような悪さをした」は“He always played the following trick.”のように書くのが正しいのですが、だからといって、このalwaysを文頭または文末に持ってきた文は、相手に通じないかといったら、決してそうではありません。特に会話では順次に音声は消えていくので、動作の頻度が「いつものこと」だったという印象だけが残って、文法のおかしさは瞬時に消えてしまいます。

それどころか、最近の「言語習得研究」によれば、英米人でも最初は頻度の副詞の位置を間違えながら言語を習得していくのです。間違いの段階を経ずに一挙に正しい文法を身につけるひとはいないというのが、最近の言語習得研究の成果なのです。ですから、何度も言うように、英語の基本型「セン (マル) セン」さえ正しければ、とにかく相手に通じる英語になるのです。

ところで私は先に、「特別な場合を除き、英語の基本型は“セン (マル) セン”だ」と述べました。では、その特別な場合とは何でしょうか。それが「いつも次のような悪さをした。」に続く次の例文です。

「助けて。狼が来た。」と村人を呼ぶのだ。

この「助けて」という呼びかけは、「助けてくれ」の短縮形で、ふつう「命令文」と呼ばれています。名前は「命令」ですが、内容は相手に自分を助けてくれるよう頼んでいるのです。つまり下記のような文を「頼み」「依頼」にしたものと考えて良いわけです。

あなた (助ける) 私

You (help) me

では、この文を「命令」「頼み」「依頼」の文にするにはどうすればよいのでしょうか。英語では、この基本型「セン(マール)セン」の主語 You を省くことによって「命令」を表すことにしているのです。つまり“Help me.”だけで「助けてくれ」という意味になるのです。

しかし「(どうぞ)助けてください」と丁寧に頼みたいときは、その前後に please という語を付け加えることになっています。この please は上記の「どうぞ」「どうか」に当たる言葉です。つまり次のようになります。いずれにしても、ここで重要なのは「命令文」の原型は「セン(マール)セン」だということです。」

“Help me, please!”

“Please, help me!”

このように「命令文」の原型は「セン(マール)セン」なのですが、「助けて」と叫んでいるときは、動詞の前の You だけでなく、動詞の後の me も省略することができます。なぜなら日本語でも単に「助けて!」という場合は、助けて欲しいのは「私(me)」に決まっているからです。要するに「助けて!」は“Help!”だけでもよいということです。

さて次の課題は「狼が来た。」の英訳です。しかし、これは簡単な解決方法があります。それは「助けて。狼が来た。」を「助けて。狼だ。」として英訳する方法です。

「助けて」が「助けてくれ」の省略形で、英訳“Help!”で済むとすれば、「狼が来た。」を「狼だ!」

と考え、それを“Wolf!”と英訳しても良いと思われるからです。

それどころか、村人に大声で助けを求めるのであれば、単純に「助けて。狼だ。」と叫ぶのが普通であって、「狼が来た。」というような主語・述語がきちんとそろった文は、かえって不自然ではないでしょうか。

もし「狼が来た。」というような主語・述語がきちんとそろった文で言うのであれば、「助けて。」も短縮形ではなく、「助けてくれ。」とする方が、文体として統一性があるように思えます。

もっと細かなことを言えば、私が子どもだったら、「狼だ!」と先ず叫び、それから「助けて!」と言うように思うのです。この方が日本語としては自然ですし、それどころか、この少年は“Wolf! Wolf!”と何度も叫んだのではないのでしょうか。

そもそも英訳したい日本語(複文)を易しい日本語(単文)にしたのは、明快で平明な英訳にする練習をするためでしたから、このように「助けてくれ」「助けて」「狼が来た」「狼だ」に換えて英訳することができるようになれば、私たちはもっと簡単に英語が話せるようになるのではないのでしょうか。頭に浮かんだことを、そのままのかたちで英語にしようと思うから、英語で話せなくなるのです。

さて、「狼だ!助けて!」を“Wolf! Wolf! Help me!”と訳すことができたとして、では次のまとまった文「狼だ!助けて!」と村人を呼ぶのだ。」は、どのように英訳すればよいのでしょうか。

狼だ!助けて!
Wolf! Wolf! Help me!

「狼だ!助けて!」と村人を呼ぶのだ。

これを例によって英語の基本型「セン(マール)セン」に転換するとすれば、どうなるのでしょうか。それには先ず、日本語の習慣によって省略されている主語、すなわち「呼ぶ」の動作主を補わなければなりません。すると次のようになります。

その羊飼いの子ども (呼ぶ) 村人、

「狼だ。助けて。」

しかし既に述べたように、この「羊飼いの子ども」は旧情報だからこそ日本語では省略されているのでした。そして英語では旧情報の主語が人間の場合、それを「人称代名詞」で表現することは、前章で述べたとおりです。すなわち次のようになります。

彼 (呼ぶ) 村人、 「狼だ。助けて。」

He (call) the villagers: “Wolf! Wolf! Help me!”

ただし、ここで注意しなければならないことがあります。それは、この物語全体が過去形で進んでいるという点です。したがって、日本語では下記のように「呼ぶのだ」は現在形になっているかもしれませんが、英語では過去形にする必要があります。

むかし羊飼いの子供がいた。いつも次のような悪さをした。

「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。

He (called) the villagers :

“Wolf! Wolf! Help me!”

しかし、ここで一つ疑問が出るかも知れません。それは「英語の基本型に単語を並べれば通じる英語になることは分かったが、下記の空欄にどのような英単語を埋めればよいのかが分からないとき、どうするのか」という疑問です。特に「悪さをする」を“play a trick”と表現する力は誰でも持っているわけではないので、この疑問は当然といえば当然の疑問です。

[いつも] 彼 (した) 次のような悪さ

[Always] he (played) this tick

しかし、本書の目的は英単語さえ与えられれば、英語は簡単に書けるようになるということを体験してもらうことにあります。

このことは一見、馬鹿げた提案のように聞こえるかも知れません。しかし、私の教えている大学生の英作文を読んでいると、単語が並んでいても意味不明の英文が少なくないのです。これでは英会話ができるようにならないのは当然だと思うのです。

彼らの英文が意味不明になる原因はどこにあるのでしょうか。それは英語の基本型「セン (マル) セン」から外れた英文を書いているからです。しかも頭に浮かんだ日本語(複文)をそのまま英語にしているので、なおさら意味不明の文章になっているのです。

私の教えている英語教育講座の学生、「将来の英語教師」ですら、状況は余り変わらないのです。このような体験を通じて私は次のことが大切だと思うようになったのです。

- 1)頭に浮かんだ日本語は、そのままでは英語にしない。
- 2)浮かんだ日本語(複文)を、なるべく明快で易しい日本語(単文)に言い換えてから英文にする。
- 3)単文と単文のつながりも、単なる羅列ではなく、「つなぎ語」を重視し、論理的で筋の通ったものにする。
- 4)単文に言い換えた日本語は、英語の基本型「セン (マル) セン」で表現できないかを先ず考える。
- 5)そのために、日本語の基本型「セン セン (マル)」を英語の基本型に並べ替えることを優先する。いきなり英語にしない。

要するに、「日本語を日本語に言い換える」作業が重要なのです。「複文 単文」「日本語の語順 英語の語順」という作業を日本語で出来るようになれば、英訳つまり英会話は半分以上は終わったのと同じになるのです。逆に、これが出来ないといつまで経っても書く英語は意味不明のままに低迷することになり、いつまで経っても英会話が出来ようにならないのです。

何度も言いますが、どれだけ英単語を知っていても、並べ方を間違えれば通じない英語になります。逆に英単語の使い方が間違っているとしても、語順

・文順が正しければ通じる英語になるのです。問題は「日本語力」をどれだけ持っているかにかかっています。だからこそ本書では、「日本語を日本語に言い換える能力」をどうすれば育てられるか、それを重視しているのです。

もちろん語彙力を付けることも重要です。しかし、それは単語・熟語を丸暗記しても決して役に立つ知識にはなりません。ではどうすれば役に立つ語彙が蓄積されていくのか。それについては、あとでゆっくり説明する機会があると思います。取りあえず今は、このイソップの翻訳を先に進めることが重要です。そうすれば、また新しいことが見えてくるはず。頑張りましょう。

< 追記 >

上記では「村人を呼ぶ」というのを“call the people of the village”としましたが、もしこれを「村人に(助けを求めて)呼びかけた」と考えれば、“call to the people of the village”という英語になります。

また「村人」を「村」(village)の「人たち」(people)と考えて、“the people of the village”としましたが、これを1語で“the villagers”で表現することも出来ます。すると英訳は次のようになります。

< 「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。 >

He (called) to the villagers :
“Wolf! Wolf! Help me!”

第7章 埋め込まれた英語の基本型

さて引き続き、以下のイソップ物語の英訳を続けていきます。今までは一文ずつに挑戦してきましたが、少しずつ英訳の分量を増やしていきたい

と思っています。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして本当に狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。(改訂版)

さて上の物語で既に英訳されているものは、下記の通りです。英訳も一緒に付けておきます。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。

Once there was a shepherd's boy along time ago. He always played the following trick. He called the villagers, " Wolf! Wolf! Help me!"

ここでは「少年文庫版」の「助けて。狼が来た。」を更に「狼だ。助けて。」と改訂してあります。

また同じく「少年文庫版」では、「しばらくして狼がきた。」となっているのですが、これも読み返してみると、嘘をついているうちに本物の狼が出てきて困ったわけですから、「しばらくして本当に狼がきた。」というように、下線部を補った方が日本語として自然です。

そこで、この下線部も補い、「改訂版」「改訂版」として上に載せてあります。何度も言いますが、このように明快で論理的な日本語にする訓練が「通じる英語」の土台です。

意味不明の日本語を、正しい単語で英訳しても絶対に通じる英語にはなりません。ところが、日本では会話用のフレーズを丸暗記させて英語力を向上させようとする本や番組が余りに多すぎるのです。

前置きはこれくらいにして本題に移ります。本章では次の部分をまとめて英訳することにします。

村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。

そこで先ず「村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。」を英語の語順に入れ替えることを考えます。

といっても「村人は駆けつけた」(The villagers rushed up.)は日本語の語順と変わりません。そこで、実質的には「そして子供の嘘を知った。」だけを考えることとなります。

既に述べたように、日本語では旧情報の主語が省略されるので、これを補うことが英訳の第1歩です。もちろん「子どもの嘘を知った」のは「村人」ですが、この旧情報を英語では「人称代名詞」「彼ら」で表現することも既に述べました。すると上記の文は次のようになります。

彼ら (知った) 子どもの嘘
they (found) the boy's lie

この「知った」を、上では find「見いだす」「発見する」という動詞を使って表現しています。これは「子どもが嘘をついていたことを発見した」という長い文を縮めたものと言えます。

このように考えると、英語の知識よりも日本語で考えることの重要性がよく分かるはずです。日本語で考えれば次のようにも言えることが分かる

でしょう。

< 彼らは知った、その子どもが嘘をついたことを。 >

彼ら (知った) [その子ども (ついた) 嘘]
they (found) [the boy (told) a lie]

< 彼らは知った、それが[単なる]嘘(冗談)だということ。 >

彼ら (知った)
[それ (あった) [単なる] 嘘(冗談)]

このように日本語で考える力があれば別の表現はいくらでも可能です。同じことは「村人は駆けつけた。」でも言えます。

たとえば、「駆けつけた」を rush up で表現することを思いつかなければ、「駆けつける」の意味を日本語で考えればよいのです。つまり「走ってきた」と考えれば“ran up, came running up”と英訳することも出来ます。この up は「心の中心に向かう方向」を示します。

単語 up, down はふつう「上へ」「下へ」を表す副詞ですが、必ずしも実際の上下だけを示すわけではありません。これは汽車の「上り」「下り」を考えれば分かるでしょう。岐阜から東京へ行く新幹線は「上り」と言われていますが、皆さんも御存知のように、これは東京が岐阜よりも高度が高いからではありません。

しかし、このような知識がない場合、「駆けつけた」はどう表現すればよいのでしょうか。そのときは「彼を助けに来た」(came to help him)「彼を見に来た」(came to meet him)という表現で間に合わせておけばよいのです。もっと簡単に「彼(のところ)に走ってきた」と考えれば、ran to him だけでも十分に言いたいことは伝わるでしょう。

ですから、繰り返しになりますが、英語力は日本語力なのです。言いたいことを別の易しい日本語に言い換える力さえあれば、英会話はそれほど難しくありません。言い換えれば、小学校から英語教育を始めても、必ずしも英語学力が伸びる保証はないのです。逆に、成人に達してからであっても、以上のような考え方に立てば、英語力は無限に伸びる可能性があるのです。

少し話が横道に逸れたので元に戻ります。英訳の対象になったのは、次の文章のうち最初の2文でした。その英訳を先ず載せておきます。そして残りの2文に挑戦してみます。

村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。
The villagers rushed up.
And they found it was only a joke.

でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。
それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。

さて、「でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。」ですが、これを日本語の語順に入れ替えるには、どうすればよいでしょうか。そのためには、この文をさらに2つの単文に分解する必要があります。

でも子供は面白かった。
そして度々同じ嘘をついた。

では、この単文を英語の基本型「セン (マル) セン」に並べ替えるには、どうすればよいでしょうか。

「たびたび同じ嘘をついた。」は、省略された主語「彼」を補えば、簡単に「彼 (ついた) 同じ嘘」となりますが、「子供は面白かった。」は少し工夫が必要です。

というのは「面白がる」の対象語がないから、基本型「セン (マル) セン」が作れないからです。

では、子どもは「何を」面白かったのでしょうか。村人達が子どもの嘘を信じて駆けつけてきたことでしょうか。もしそうだとすれば、次のようにしなければなりません。

子供 (面白がった)

村人達が子どもの嘘を信じて駆けつけてきたこと

しかし、これでは文が長すぎて英訳がとても難しくなります。ではどうすればよいのでしょうか。いちばん簡単な方法は、「村人達が子どもの嘘

を信じて駆けつけてきたこと」を、人称代名詞「それ」で代用することです。

言わなくても分かる旧情報だからこそ日本語では省略されたのです。しかし英語では省略できません。だからこそ、英語では、その旧情報を代名詞「それ」(it)で受けるのです。

すると上記の長い文は「子供 (面白がった) それ」という短文になります。以上のことをまとめて図式化すると次のようになります。

でも 子供 (面白がった) それ ;
But the boy (enjoyed) it ;

それで 彼 たびたび (ついた) 同じ嘘
And he often (told) the same lie

ここで注意して欲しいのは、「面白がる」「楽しむ」(enjoy)、「(嘘を)つく」「言う」(tell)と、日本語を言い換えながら英訳を考えていることです。「日本語を日本語に言い換える力」です。

また確認しておきたいのは「たびたび」(often)という「頻度の副詞」が動詞(told)の前に来ていることです[助動詞が来れば、その後]。前にも述べたように、ふつう英語の副詞は動詞の後に来るのですが、「頻度の副詞」だけは例外なのです。

(助動詞 + 頻度の副詞 + 動詞)

He (does | not always | tell) a lie.

彼はいつも嘘をついているわけではない。

しかし、これは英語の基本型「セン (マル) セン」から比べると些末なルールです。この「頻度の副詞」の位置が少しぐらい間違っても、伝えたい意味の幹にはさほど影響があるわけではありません。ですから、これは記憶の片隅に留めておく程度にして、当面は余り気にしない方が心の健康にはよいかと思います。

さて、ここまで来れば、この章での挑戦対象は「それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。」の一文だけになりました。あと一息です。とは言っても、この文は、どうすれば英語の基本型「セン (マル) セン」に転換できるのでしょうか。解

答は次のとおりです。

村人(考えた) [その子ども(ある)嘘つき]

ここに基本型「セン(マル)セン」が二重に埋め込まれていることに気づかれたでしょうか。その先ず第一は「村人(考えた) []」です。つまり、括弧全体が「セン」になっているわけです。

そしてさらに、括弧の中が、[その子ども(ある)嘘つき]というように、「セン(マル)セン」になっているのです。これをもう一度、図式化すると次のようになります。

村人(考えた) []
the villagers (thought) []
その子ども(ある)嘘つき

上記で使われている“thought”は「考える」(think)という動詞の過去形です。また「嘘つき」(liar)という名詞は「嘘をつく」(lie)という動詞に「... する人」の意味を表す接尾辞(-er)を付けて名詞にしたものです。最初は“lie + er” “liar”という綴り字だったのですが、いつの間にか今の綴り字になってしまいました。

また「嘘をつく」(lie)という動詞は、「嘘」という名詞としても使われ、「嘘をつく」は一語の動詞として表現されるよりも、“tell a lie”ということの方が多いのです。だから既に、「子供は、たびたび同じ嘘をついた」の英訳の時に、これを使いました。

つまり、英語では、一語の動詞で済む場合でも、「セン(マル)セン」のかたちをとることが極めて多いのです。これは、「セン(マル)セン」が英語の基本型として如何に定着しているかを改めて示すものだと言えるでしょう。

それはともかく、上記の二つの基本型を合体させると次の英文になります。実は、これと同じかたちを「彼らは知った。それが嘘(冗談)だった

ことを。」の英訳で既に使用していたのでした。

“The villagers (thought) [the boy (is) a liar.]
村人(考えた) [その子ども(ある)嘘つき]
They (found) [it (was) [only] a lie (a joke)]
彼ら(知った)
[それ(あった) [単なる] 嘘(冗談)]

しかし、ここで注意して欲しいのは“is” “was”となっている点です。英語では「時制の一致」といって、親文(主節)で過去形を使うと、それに応じて子文(従節)でも過去形にしなければならないという決まりがあるのです。

ですから、「村人はその子どもを嘘つきだと考えた」の場合も、括弧内の動詞「ある」(is)を過去形(was)にしなければならないのです。

“The villagers (thought) [the boy (was) a liar.]
子文(従節)
親文(主節)

さて以上で、本章で挑戦対象にしていた文章の英訳が全て終わりました。そこで、以下に再録しておくことにします。「セン」「マル」の記号は省き、文と文をつなぐ接続語だけは、文章の論理関係が分かりやすくなるように、二重下線で示すことにします。

村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。

The villagers rushed up to him. And they found it was only a joke. But the boy enjoyed it and he often told the same lie. And so they thought he was a liar.

ここでは「村人は駆けつけた」だけでは何となく文章として収まりが悪いので、「彼(その少年)のところへ」という意味を込めて、“to him”を最後に付け加えてあります。

また「それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。」は旧情報なので、ここでは「彼」(he)としておきました。しかし、このような修正を加えなくても以前の文で十分に相手に通じる英語になっているのです。このような修正はゆとりがある人だけがすれば良い作業なのです。

ところで前の章で「語彙をどのように蓄積するかは、章を改めて述べたい」と書きましたが、一つの章の長さが伸びすぎると、読むのが疲れます。そこで、ひとまず休憩を入れ、章を改めて、私の経験と提言を書きたいと思います。頑張って次章も読んでいただくと有り難いと思います。

第 8 章 間違いなしに言語は習得されない

引き続き、イソップ物語の英訳を続けながら、どうすれば英語の力をつけれるかを考えていきます。

これまで少しずつ英訳の分量を増やしてきましたが、出来れば、この章で英訳を完成させたいと思っています。この物語で既に英訳されているものは、下記の通りです。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々^{たびたび}同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。

Once there was a shepherd's boy. He always played the following trick. He called the villagers, " Wolf! Wolf! Help me!" The villagers rushed up to him, and they found it was only a joke. But the boy enjoyed it, and he often told the same lie. So they thought he was a liar.

とすると、あと残っているのは次の文章ということになります。

< しばらくして本当に狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。(改訂版) >

上の文章で最初の2文は「動作の対象語」がありませんから、基本的には日本語の語順と同じになり、余り難しい点ははありません。例によって記号づけして下記に図示しておきます。

しばらくして 狼 [本当に] (きた)
After a while the wolf [actually] (appeared)
それで 子供 (叫んだ)、「(来て)くれ」、狼だ。
Then the boy (cried) out、「(Come), please!、Wolf!」。

上では「しばらくして」を“after a while”としましたが、この“while”は名詞で「しばらくの間」という意味です。これを「この後すぐに」と考えて、“shortly after this”としてもよいでしょう。

あるいはまた、これを「数日後に」「二、三日後に」と考えて、“a few days after this”“two or three days after this”“a few days later”“two or three days later”と表現することも可能です。要するに「日本語を日本語で言い換える力」があれば、基本的には通じる英語になるのです。

同じことは「狼がきた」についても言えます。上では「きた」を「現れた」と考えて、“appear”という動詞を使っていますが、もちろん単純に come の過去形 came を使っても良いのです。助動詞 do を使って“did come”とした方が強調の感じが出るかも知れません。

要するに、どのように言おうが基本的語順さえ間違えなければ通じる英語になるのです。上記の「子ども」にしても、ここでは「少年」で済ましてありますし、「叫んだ」も「大声で」の意味合いを込めて“cry out”としましたが、もちろん“cry”の1語で良いのです。

さて、「しばらくして本当に狼がきた。それで子供は“来てくれ。狼だ。”と叫んだ。」に続く次の文章は、「しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。」です。例によって、これを英語の語順に入れ替えると次のようになります。

しかし 誰も (信じなかった) それ
But nobody (believed) it
だから 誰も (駆けつけなかった)
So nobody (ran) up [to him]

上の図で、「誰もそれを信用しなかった」が「誰も(信じなかった)それ」と変換されているのを見れば、ここでも英語の基本型「セン(マル)セン」が英訳に対して大きな力を持っていることを再確認できたのではないのでしょうか。

しかし、不思議なことが一つあります。それは、日本語の否定文「信じない」は「信じる」+「ない」から出来ているのに、上の英文では「信じなかった」に対応する動詞 believed が、マル記号で囲まれているだけで、日本語の「ない」に相当する語が何もないのです。これで、どうして「信じなかった」という否定の意味になるのでしょうか。

実は、その秘密は nobody という単語にあるのです。この nobody という単語は「no(ゼロの) + body(体、ひと)」の合成語です。だから、“Nobody believed it.” は「ゼロのひとがそれを信じた」ということになります。つまり「それを信じたひとがゼロ人だった」のです。だから、「誰もそれを信用しなかった」という意味になるわけです。“Nobody ran up to him.” が「誰も駆けつけなかった」となるのも、これで納得できるはずです。

英語には、このように文全体を否定の意味に換える不思議な形容詞 no があるのです。だから「私にはお金が一銭もない」という日本語を英訳するとき、この形容詞 no を使えば、“I have no money.”と表現できることになります。なぜなら、上記の英文を文字通りの日本語にすれば、「私はゼロのお金を持つ」ということになるからです。

I (have) no money.
私 (持つ) ゼロのお金

しかし、英語には日本語の「ない」に相当する語がないのでしょうか。もし、「持たない」=「持つ」+「ない」に相当するかたちが英語にもあれば、日本語との類似性から英訳はもっと楽になるような気がするからです。

このように考えてみると、次のような公式が成り立つことに気がつきます。つまり、「持たない」=「持つことをしない」と考えれば、英語にもこれと類似する否定形があることが分かります。

持た + ない = しない + 持つこと

I (do not have) any money.
私 (する) ない (持つ) いかなるお金

この形を使うと、たとえば「私にはお金が一銭もない」は、「私は如何なるお金を持つこともしていない」となり、次のような英語になります。要するに、この動詞 do[する]は否定形をつくる助動詞になっているわけです。

さて、以上で下記の文章「しばらくして ...」の英訳を終わりました。最後に残されたのは次の「そこで ...」以下の二文となりました。この二文を英訳すれば完成です。長い長い道のりでしたがゴールを目指して頑張りましょう。

しばらくして本当に狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。

まず第一に「安心した」をどのように英訳するかです。これをひとつの動詞で表現しようとするとう適切な単語がすぐに思い浮かびません。そこで和英辞典で調べてみます。

すると「安心する」= be relieved, feel relieved, feel safe とあります。しかし形容詞 relieved「不安のない状態で」はなかなか難しい単語で、これを使うのは誰でも出来ることではありません。

そこで 狼 (あった) 不安のない状態で
So the wolf (was) relieved

狼 (感じた) 安全に
The wolf (felt) safe

ましてや、これを動詞 feel「感じる」と組み合わせる“feel relieved”とするのは、よほど英語を知っている人でないと思ひ浮かばないでしょう。それに反して“feel safe”は「安全に感じる」ですから、これなら自分でも、それこそ「安心して」使えそうな気がします。

しかし、この“safe”も形容詞で、文型としては「動詞＋形容詞」ですから、上の図からは基本型「セン(マル)セン」と同じに見えますが、実は全く違う文型です。

というのは、英語の基本型は、既に使った例文“I have no money.”でも分かるとおり、「私(持つ)ゼロのお金」＝「動作主(動作)対象語」＝「名詞(動詞)名詞」となるのが一般的なのです。

ですから、「私(感じる)安全な状態」＝「名詞(動詞)形容詞」という文型は、英語の中では特殊な文型、非常に高度な文型で、この文型を使えるようになるのは、英語に対する一定の「慣れ」が必要です。

では英語の基本型「セン(マル)セン」を使って「安心した」を表現できないのでしょうか。

よく考えてみると「安心する」ということは、不安(fear)のない状態ですから、これを「不安を持たない」＝「ゼロの不安を持つ」と言い換えることが出来ることに気づきます。すると、「安心する」は上記の“I have no money.”と全く同じ基本型で英訳できることになります。

オオカミ (持った) ゼロの不安

The Wolf (had) no fear

こうしてみると、高度な語彙力を持たなくても、難しい形容詞 relieved を知らなくても、「日本語を日本語に言い換える力」さえあれば、英訳すなわち英会話を何とかこなせるということが、改めて分かっていただけではないのでしょうか。

上記の「安心した」を、「オオカミが村人から

の集団的攻撃を受けるのではないかという不安(fear)」の「原因(cause)がゼロになったこと」と考えれば、下記のような表現が、もっと内容にふさわしいのかも知れません。

オオカミ (持った) ゼロの原因 [不安の]

The Wolf (had) no cause [of fear]

が、そこまで厳密に考えなくても先の表現で十分に言いたいことが伝わっているのではないのでしょうか。何度も言っているように、この例文を通じて「日本語を日本語に言い換える力」がいかに大切かを実感してもらえれば、それでよいのです。

「日本語を日本語に言い換える力」の重要性については次の最後の例文についても言えます。

「そして楽々と羊をみんな殺してしまった。」

先ず第一に注意して欲しいのは、主語「狼」は旧情報ですから日本語では省略されていることです。英訳するためには必ずこれを復活させなければなりません。これなしでは、いくら基本型を知っていても英語にならないからです。

つまり「日本語を日本語に言い換える力」といっても様々なレベルがあるわけです。複文を易しい単文に分解する力だけでは英語にはできないのです。さらに、その次の段階として単文を英語の語順に並べ替える力が必要なのです。

そして、この「単文の構成要素を英語の語順に並べ替える」際に、「省略されている旧情報(主語)を補う力」が求められるわけです。しかし、この欠けている「主語」を補うことさえできれば、ここでは、英語の基本型がそのまま通用するので英訳は極めて簡単です。

そして オオカミ (殺した) 羊をみんな 楽々と

And the wolf (killed) all the sheep easily

ただし、その際、「羊をみんな」「すべての羊」、「楽々と」「簡単に、容易に」と言い換える力が必要なのですが、これはそれほど高度な日本語力を必要としないはずで、むしろ誰もが

無意識にやっている作業だといって良いくらいです。

もちろん語彙力のある人は、「楽々と」を「意のままに」「ゆっくりと時間をかけて楽しみながら」と言い換えて、これを“at (his) leisure”と表現することもできるでしょう。ちなみに、この“leisure”は日本語で「レジャー」に当たる単語で、「暇、余暇」という意味です。

ところで、ここで人称代名詞 his を括弧に入れているのは、これを省略して“at leisure”としてもよいという意味です。また代名詞「彼の」を使って“at (his) leisure”としているのは、狼を擬人化しているからです。イソップ物語は動物をすべて擬人化して使っている寓話ですから、この方が自然ではないでしょうか。

すると、「そして楽々と羊をみんな殺してしまっただ。」で補った旧情報（「殺してしまっただ」の主語）は、「狼」とするよりも「彼」とする方が適切だということが分かります。既に何度も述べているように旧情報の主語はふつう代名詞で表すのが英語の習慣だからです。すると先の英訳は次のようになります。

そして 彼 (殺した) 全ての羊 簡単に
And he (killed) all the sheep easily

さあ、これで本章の全ての英訳が終わりました。その成果を確認するため以下に英訳を再録しておきます。日本語を日本語に言い換える力さえあれば、英訳(英会話)は意外と難しくないと、ということがお分かりいただけたのではないかと思います。

しばらくして本当に狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。

After a while the wolf really appeared. Then the boy cried out, "Help, please! The Wolf!" But nobody believed it. So nobody came running up to him. Then the wolf had no cause of fear, and he killed all the sheep.

上記の英文を見れば、英語の基本型は「セン(マ)セン」であることが改めて確認できるのではないのでしょうか。通じる英訳(通じる英会話)のためには、当面のところ、これ以外の細かな英文法は何も必要ないとすら言えそうです。

そこで、次章では今までに学んできたことを再び整理して更なる飛躍に備えたいと思います。紙面にゆとりがあれば、そこで「語彙の獲得と英語の読み」についてもう一度ふれたいと思います。引き続き頑張って次章に挑戦してください。

<参考> ところで最近、“I do not have no money.”という表現もよく見かけます。これに対して、これは「文法的には誤りである」とか、「黒人がよく使う野卑な英語だ」という意見も少なくありません。ところが、有名なロックグループが歌っている曲で、I CAN'T GET NO SATISFACTION という有名な歌があります。彼らはこの曲を大声でシャウトしているのです。

I (can | not | get) no satisfaction
 俺 (できる | ない | 得る) 如何なる満足
 俺は如何なる満足も得ることができない
 (俺は絶対に満足できない)

つまり、not と no が重なっている表現は「二重否定」と呼ばれ、「馬から落ちて落馬して」と同じく論理矛盾なのですが、今では間違った表現という意識が大きく薄れているようです。

これは「全然」という副詞が、かつての日本語では肯定文に使われることが多かったのに、今では「全然 ... できない」というように否定文で使われているのと、どこか似ているように見えます。それどころか、最近の若者言葉では再び肯定文で使われています。

このように言葉というものは常に変化していくものなのです。ですから英訳(英会話)をするときも「英米人はそんな言い方をしない」という批判を余り気にせず、とにかく書いて(話して)みるという姿勢が大切なのではないでしょうか。

この否定に関連して、言語習得研究は次のような興味ある事実を報告しています。つまり、英語の否定形を習得する順序は、母語の違い、地域の違い、年齢の違いにかかわらず、上記のようなステップを経て、正しい形を習得していくというのです。

発達順序	内容	例文
ステップ1	文の前か後に no	I can swim no. No I can swim.
ステップ2	文の中に no	I no can swim.
ステップ3	助動詞に否定が付加	I can't swim. I can't eat nothing.
ステップ4	習得完了	I cannot swim.

		He doesn't anything.
--	--	----------------------

「**ステップ1**は、否定辞の no が文の前後のどちらかについて、否定の意味を表している段階である。**ステップ2**では、否定辞の no が文の中に入り込んでくる。そして、**ステップ3**の段階では、助動詞に否定辞がついて can't や won't となって使われる。しかし、それらは can+not という分析的な理解ではなく、can't という 1 つの語の固まりとして覚えられている可能性が高いとされる。そして**ステップ4**で、最終的に否定形が習得される段階になる。」(出典：迫田久美子『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク)

上では、先に、言語習得研究の成果を踏まえ、「英語の否定形を習得する順序は母語の違い・地域の違い・年齢の違いにかかわらず、ほぼ一定であり、幾つかのステップを経て正しい形を習得していく」ということが述べられています。

それによれば、「ステップ3の段階では、助動詞に否定辞がついて can't や won't となって使われる。しかし、それらは can+not という分析的な理解ではなく、can't という 1 つの語の固まりとして覚えられている可能性が高い。」のでした。

これに関連して、「俺は満足できない」を英語で表現するとき、英語の母語話者でさえ、しばしば“I can't get no satisfaction.”という誤りを犯すということ、それどころか、若者言葉では、これが誤りと意識されていないということも述べました。

これに関連して、もうひとつ面白いことは、助動詞 can に否定辞 not をつけて否定の意味を表現する場合、“I can't get no satisfaction.”を “I cannot get no satisfaction.”と言うことはあっても、“I can not get no satisfaction.”と言う表現はしないという事実です。

これは“don't have”を“do not have”と表現することはあっても、決して“donot have”と表現しないことと比べれば、かなり興味深い事実です。これは既に紹介した言語習得研究の成果を踏まえて考えれば、次のように解釈できます。

「それは、cannot が、can+not という分析的な理解ではなく、can't と同じように、1 つの語の固まりとして覚えられている可能性が高い。」

言い換えれば、助動詞 can だけは、「最終的に否定形が習得される段階(ステップ4)」に達していないことになりそうです。これと同じことが、否定形にのみならず動詞の過去形など、他の文法形態素についても報告されて

います。

母語話者ですらこんな状態なのですから、私たち外国人が誤りを犯すのは当然なのです。要するに間違いを経ながら言語は習得されていくのです。逆に言えば、間違いを経過せずに正しい文法を習得することはあり得ないのです。ですから私たちは自信をもって間違えて良いのです。

第9章 単文は「幼稚な文」ではない

英訳(英会話)の力をつけるに当たって、これまでの章で何度も確認したことは次の諸点でした。それを再度、箇条書きにすると以下ようになります。

1 私たちに必要なのは「日本語を日本語に言い換える力」である。

2 伝えたい日本語(複文)を明快で分かりやすい単文に言い換える。

3 言い換えられた単文を筋道が通った日本語になるように論理的な接続語でつなぐ。

4 日本語の単文を基本型「センセン(マル)」に分析し、それを英語の基本型「セン(マル)セン」に並べ替える。

5 基本型「セン(マル)セン」の各々に英語の単文を当てはめる。うまく当てはまる英単語が思い浮かばない時は、日本語の方を別の言い方で表現できないかを考える。

さて、このような手順を経て出来上がった英訳は下記のようなものでした。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして本当に狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。

Once there was a shepherd's boy. He always played the following trick. He called the villagers, "Wolf! Wolf! Help me!" The villagers rushed up to him, and they found it was only a joke. But the boy enjoyed it, and he often told the same lie. So they thought he was a liar. After a while the wolf really appeared. Then the boy cried out, "Help, please! The Wolf!" But nobody believed it. So nobody came running. Then the wolf had no cause of fear, and he killed all the sheep.

上の英文は単文ばかりで出来ているので、いかにも幼稚な英文のように見えるかも知れません。しかし英会話で話す英語としてはこれで十分なのではないでしょうか。

それどころか、博士論文すら単文で書くことがあるのです。岐阜大学に教養部がまだ存続していた頃、私が英語科の主任をしていたことがありますが、そのとき新任教師を公募で採用する機会がありました。

応募者のなかで最終審査に残ったひとの一人に、京都大学を卒業し米国コロンビア大学で博士号を取得してきたばかりの若い人がいました。その博士論文を読んで驚いたのは、彼の論文の殆ど全てが単文で書かれていたことでした。

しかし、彼は文体的にみると極めて稚拙な英文で論文を書き、それにもかかわらず難しい論文審査に合格して、見事に博士号を取得しているのです。ということは、単文でも複雑で高度な思考を表現できるということなのです。

ですから、単文しか書けないということで自分を卑下する必要は全くないのです。それどころか、複雑で高度な思考を単文で表現するためには、極めて明晰な頭脳を必要とするのです。なぜなら頭に浮かんだ曖昧な思考内容を明快で論理的なものに再構成しなければ、それを単文で表現できないからです。

私が主催する英語教育の研究会で、かつて新美南吉の童話『ごんぎつね』の英訳に取り組んだことがあります。上記で私が提案している「五つの手順」で英訳をおこない、それを英作文の教材としても活用しようという計画でした。ところが、

ほとんどの教師は上記手順の2 - 3で行き詰まってしまうのでした。

彼らの多くは、文学部英語科や教育学部英語科などを卒業した優秀な教師でした。それにもかかわらず手順の最初で足踏みをして結局は上記の企画を断念せざるを得なくなったのです。何故このようなことになったのでしょうか。その一つの原因は、彼らが英語の得意なひとたちの集まりだったからではないかと考えています。

というのは、彼らは童話『ごんぎつね』の和文を見れば、それに対応する英語が直ぐに思い浮かぶので、それを単文に分解する作業が煩わしく見えるからです。それどころか、単文に分解しようとする、文と文のつながりを論理化し、文章としても自然な流れにしなければならぬため、かえって頭が混乱したのではないかと思うのです。

たとえば、関係詞を使えば簡単に表現できるように、それを分解して単文で表現しようとする、和文の裏に込められている思考や論理を明晰化しなければならず、かえって思考の負担になるわけです。ところが英語が不得意な人にとっては事態が全く逆です。語彙力が貧弱なため、日本語に対応する英語が思い浮かばず、結局は英訳(英会話)を諦めてしまうのです。

よく「英語で思考しなさい。」(Think in English.)と言われますが、そんなことが出来れば英語学習など必要ないのです。ところが巷の英会話指導書には「英語で思考しないから、いつまで経っても英語力が伸びないのだ。」などとの文言が散乱しています。そして私たちのような凡人は、いつまで経っても「英語で思考できない」自分に劣等感を感じ嫌気がさして、英語学習のレースから退場することになります。

しかし、どんなに巧みなバイリンガル(二言語使用者)でも、深く考えるときには優先言語(ふつうは母語)で思考しているのです。しかも、最近の言語習得研究からでも明らかになっているように、母語は必ずしも外国語習得にとって妨害・干渉要素ではありません。それどころか、読み書きにおいては、「正の転移」となることが分かっています。

つまり、日本語できちんと読み書きができる能力があるひとは、その能力を外国語学習に転移することが可能なのです。だとしたら、その能力を鍛え、それを外国語学習に使わない手はないでしょう。それどころか、小学校の英語教育が、もし日本語教育の時間を奪い日本語で考えるちからを阻害する方向に働けば、長い目でみると、かえって日本の英語教育を遅らせる原因になるかもしれません。

なぜなら小学校の英語活動で覚えた細切れのフレーズは、既に述べたように、日常生活で頻繁に使うものではないので消えていくのが普通だからです。その結果、「小学校で六年間も英語をやっているのに」という批判が出て、ますます暗記主義の英語教育が小学校で蔓延する危険があります。(米国で何不自由なく英語を駆使していた子どもの音声力・語彙力すら帰国すれば確実に消えていくのです。)

ところが他方、成人は子どもと違った高い日本語能力を持っています。ですから、この能力を使えば、子どもが英語学習で費やす時間より遙かに短い時間で高い英語力をつけることができます。ですから、成人になってからの英語教育では遅すぎるとするのは迷信なのです。それどころか、最近の研究によれば、成人になってから身につけた英語力は消えていく度合いが小さいのです。

よく言われる音声力についても、成人になってからでも決して遅くはありません。今までの学習法・教授法が間違っただけなのです。確かに大人になってからの音声学習では、「地方訛り」が残ることは事実ですが、音声の「英語らしさ」さえ身につければ、立派に通じる英語になりますし、聞き取れるようにもなります。それについて本書で詳しくふれることは無理ですが、成人になってからでも遅くないことだけは保証できます。

また「なまり」についても実は劣等感を持つ必要はないのです。もし地方訛りが恥ずかしいとか、「訛りがあるから、それは日本語ではない」ということになれば、私のような能登訛りの日本語を話す人間は日本人ではないことになります。それどころか英国人からすれば米国人の話す英語は、「米語」であって「英語」ではないことになりま

す。(実は米国人自身で「野卑な米語」を恥じ「英語」(Queen's English)に憧れているひともし少なからずいるのです。)

実を言うと、私も東京で大学生活をしていた頃は、自分の能登弁が恥ずかしくて仕方がない時期があったのです。能登弁が自分の田舎者丸出しぶりを象徴するようで、恥ずかしくて仕方がなかったのです。でもよく考えてみると関西出身のひとは決して自分の話し方を東京弁あるいはNHK的日本語にしないのです。だとすれば、自分だって自分の訛りで話しても恥ずかしいことはないのではないか、と思いついたのです。そして国連総会でも皆が自分のお国訛りで英語演説をしているのに気づくようになりました。

要するに、音声面でも文字面でも、自分の英語は訛りがあっておかしいのではないかと、自分の英語は単文ばかりで幼稚すぎるのではないかと、などと恐れる必要はないのです。音声面での英語の基本型すなわち「リズムの等時性」と文字面での英語の基本型「セン(マル)セン」さえ守った英語であれば、全く正当な英語だと考えて良いのです。英米でも地方訛りはひどいですし、間違った英語を書く英米人は少なくありません。

このような観点で、英語学習を見直すと改善点の新しいポイントが見えてくるように思います。たとえば、読みは複文、書く(話す)は単文を中心に学習(または教育)をするということです。つまり当面、私たちは複文で難しい英語を書いたり話したりする訓練をする必要はないということです。それよりも単文で言いたいことをたっぴりと書いたり話したりする学習をすべきだということです。語彙を蓄積するためには複文が読めなければなりません、複文を書ける必要はないのです。

ところが学校では文法の授業で「単文同士を関係詞で結びつける」練習ばかりしています。しかし、いま必要なのは「関係詞で結ばれた複文を単文に分解しながら英文の流れに沿って読む」訓練です。なぜなら、このような訓練なしでは英文を直読直解できるようにはならないからです。ところが既に述べたように、文法の授業では「単文同士を関係詞で結びつける」練習ばかりしています

し、読解の授業では関係詞の後から逆行して意味を取る訓練がいまだに横行しています。

これでは英文の内容に入り込み、その面白さに引き込まれながら速読することは永遠に出来ません。関係詞が出てくるたびに視線は必ず逆行せざるを得ないからです。これでは一文一文を正確に読み取る訓練にはなっても、読みの速度が落ちるため内容全体への関心はどこかに消えてしまいます。内容に引きつけられて読むからこそ学習が持続するのですし、読みの速度が速いからこそ量が読めるのです。そして量を読むからこそ語彙が蓄積するのです。

また、英文の複文を分解し単文にする作業を優先させれば、複文がどのような単文から出来ていたのかを再確認できますし、これは単文を結びつけて複文を作り出す訓練よりも容易なので、生徒の学習意欲を阻害することはありません。自動車の修理工の訓練で、まず車や部品の分解作業から始めるのと似ているかも知れません。もし設計図や口頭の説明による組立訓練を優先させたら、修理工の腕はなかなか上がらないのではないのでしょうか。

ところが何度も述べているように、関係詞を使って複文を作り出す作業を優先する授業が圧倒的なのです。このような授業では、その作業の困難さに腹を立て、途中で投げ出す生徒に必ずぶつかります。これでは、関係詞を学ぶ意味がありません。

言語習得研究で明らかになっているように、学習で優先させるべきなのは「理解可能なインプット」であり、性急な「アウトプット」ではありません。幼児でさえ、母語を話し出すのに「沈黙期」というものがあるのですから。

このように、関係詞で結ばれた複文を単文に分解する作業は、「苦行道」を「易行道」に変える働きをするのですが、それは同時に直読直解への力に転化することにもなります。なぜなら直読直解という作業は、左から英文を読んでいって関係詞にぶつかったら、そこで一度立ち止まって、そこまでを単文として意味を取る作業に等しいからです。

こうして文法と読解を統一的に指導することがなければ、いつまで経っても学習したことが生きた学力に転化しないのではないのでしょうか。

だからといって私は関係詞を使って複文をつくる練習が不要と言っているわけではありませんし、永遠に単文で英作文(英会話)をしろと言っているわけでもありません。頭の中で複文がすらすら湧いてくるのに無理にそれを押さえて単文にする必要はないのです。私がここで主張しているのは、複文による作文練習を優先すると、かえって学習意欲が減退して、英語力の増進を阻害することになるということです。

また語彙力が貧弱なひとでも、日本語を日本語に言い換える力さえあれば、それほど困難なしに英作文(英会話)が可能になるのだから、その母語の力を活用しようと呼びかけているわけです。成人になってからの外国語学習では遅すぎるという風潮がいま余りにも強すぎるから、決してそんなことはないという理由を説明しているつもりなのです。さらにまた、単文に分解する力が直読直解にもつながり、それが語彙を蓄積することにも貢献するのだと主張してきたつもりなのです。

こうして英文の量を読み、語彙が蓄積され、英文の仕組みが分かるようになってきたら、複文でも書いてみたい(話してみたい)という気持ちが自然に湧いてきます。そのときこそ複文で書く(話す)好機なのです。ですから、先に単文で英訳したイソップも、英語学力に自信がある人、もう少し高度な英語で表現してみたいという人は、複文で書くことに挑戦してみればよいのです。たとえば、上記の英文は関係詞や従位接続詞を使うと次のような表現になるかも知れません。

Once there was a shepherd's boy. He always played the following trick.

Once there was a shepherd's boy who always played the following trick.

ここでは、単文と単文を結びつける「連結詞」を四角で囲んで視覚的にも分かるように表示してあります。この複文を四角の前で立ち止まって元の単文に引き戻しながら読むのが直読直解のコツなのです。

さて、この文のあとに、the following trickの「次のような」(following)とは何かの具体的

説明が続きます。

He called out to the villagers, " Wolf! Wolf! Help me!" The villagers rushed up to him, and they found it was only a joke.

He called out to the villagers, " Wolf! Wolf! Help me!" The villagers (rushed) up to him and (found) it was only a joke.

上では、The villagers...以下の二文が同一の主語なので、まとめて一文にしました。この場合は単文と単文を等位接続詞andで結んだだけなので「複文」というよりも文法的には「重文」と呼ばれるものになっています。

しかし、“...they found [that] it was only a joke.”は補充された従位接続詞thatを見れば分かるように、実は既に複文になっていたのです。そこで全体としては「重複文」になっているわけです。

ところで上記の重複文は、「それが単なる^{いたずら}悪戯だということが分かった、村人が駆けつけてみると」と考えれば次のような案も考えられます。

He called out to the villagers, " Wolf! Wolf! Help me!" The villagers found it was only a joke when they rushed up to him.

しかし、こうすると文法的には正しい文ですが、前の文とのつながりがどうしても悪くなってしまう。「村人に呼びかけた」「(それで)村人は知った」では文と文がつながらなくなってしまうからです。

ここはやはり「村人に呼びかけた」「(それで)村人が駆けつけた」ではないと文がスムーズに流れません。ですから、これは、単独の文としては複文であり高等な文になっているかもしれませんが、文章としては悪文になっています。

つまり、元のように単文と単文を論理的接続語で結んだものの方がはるかに良い文なのです。複文で書けばよいというわけではないことが、これでよく分かっていただけだと思います。単文で書くこうとするからこそ文意を明晰なものにする必要に迫られるわけです。

同じことが次の文でも起きはしないでしょうか。引き続き検証してみることにしましょう。

< But the boy enjoyed it, and he often told the same lie. So they thought he was a liar. >

But the boy often told the same lie because he enjoyed the fuss so much. So they thought [that] he was a liar.

ここでは「その騒ぎ (fuss) がとても (so much) 面白かったので」と考えて副詞句so muchを補って複文にしました。

このように考えると単文を並べる方が、何も補う必要がなく、かえって簡単だということが改めて確認できるでしょう。同じことは「その騒ぎ」(the fuss)についても言えます。

単文を並べたときは、動詞enjoyの目的語を代名詞itで済ませてありました。これは、代名詞itが何を指すかは文章の流れから自然と想起されるからです。

しかし、この文をそのまま接続詞becauseの後に持っていっただけでは、この代名詞itは“the same lie”を指すことになり、文意が必ずしも明瞭ではなくなります。

But the boy often told the same lie because he enjoyed it so much. So they thought [that] he was a liar.

そこで、この代名詞itを具体的な名詞fuss (騒ぎ) に代えたのでした。こうすれば、子どもが村人の大騒ぎを面白がって嘘を重ねたことが明瞭になるからです。

But the boy often told the same lie because he enjoyed the fuss so much. So they thought [that] he was a liar.

< なお、名詞fussという単語が難しければ、fun (ふざけ) という単語を使うことも考えられます。そうすれば子どもが悪ふざけを求めて嘘を重ねたことが明瞭になるからです。しかし、とにかく代名詞itでは誤解を生む恐れがあるのです。 >

ここで、もうひとつ注意して欲しいことがあります。それは二文を結んで一つの複文をつくる時、単に従位接続詞を使って一つにするだけでは

済まないということです。

たとえば、下記のように、A and B B + [because + A] としただけでは、文意が通らなくなりません。

< But the boy enjoyed it, and he often told the same lie. >

But he often told the same lie

主文

[because the boy enjoyed the fuss so much.]

従文

というのは、代名詞heは旧情報を指すので、普通「主文」には使われず、「従文」に使うのが一般的だからです。ですから、この文は次のように改められるべきです。

But the boy often told the same lie because he enjoyed the fuss so much.

このように考えると単文を並べた文の方が単純明快な文章になっているということが、またもや明らかになったのではないのでしょうか。そこで以下の文章は無理に複文にすることを優先せず、修正は最小限に留めたいと思います。

< After a while the wolf really appeared. Then the boy cried out, "Help, please! The Wolf!" But nobody believed it. So nobody came running. Then the wolf had no fear, and he killed all the sheep. >

After a while the wolf really appeared. Then the boy cried out, "Help, please! The Wolf!" But nobody came running because nobody believed him. Then the wolf killed all the sheep with no fear.

御覧のとおり、ほとんど変更・修正はありません。複文にしたのは「誰も駆けつけて来なかった。誰も彼の言うこと(him)を信じなかったので。」の文に従位接続詞because「...ので」を使って連結した箇所だけです。

また最後の文については、後半の主語heを削って次のように「重文」にしてもよかったです。逆に前半の文を「何の心配もなしに」という

副詞句にして「単文」にしたのが上の改正文でした。

< Then the wolf had no cause of fear, and he killed all the sheep. >

Then the wolf had no cause of fear, and killed all the sheep. >

Then the wolf killed all the sheep with no fear.

<ただし、この“with no fear”は前置詞without「...なしで」を使って次のようにも表現できます。つまり「いかなる恐怖もなしに」となるわけです。>

Then the wolf killed all the sheep without any fear.

このように「単文」+「単文」「重文」とするのではなく、それらを合体させて、更なる「単文」にする方法もあるわけです。しかし、これは「複文」や「重文」にする方法よりも高度な知識を必要とするので、誰にでも出来るわけではありません。ですから、「単文」が必ずしも「複文」より易しいわけではないことは知っておいてよい知識だと思います。

さて以上の作業をまとめると下記ようになります。

< Once there was a shepherd's boy who always played the following trick. He called out to the villagers, " Wolf! Wolf! Help me!" The villagers rushed up to him and found that it was only a joke. But the boy often told the same lie because he enjoyed the fuss so much. So they thought that he was a liar. After a while the wolf really appeared. Then the boy cried out, "Help, please! The Wolf!" But nobody came running because nobody believed him. Then the wolf killed all the sheep with no fear. >

これで英訳を複文にする作業が終わりました。複文が必ずしも明快な文章を作り出さないこと、また単文だからといって必ずしも易しい文ばかりではないことなどがお分かりいただけたのではな

いかと思います。

ですから英文を大量に読み、英語の感覚がつかめるまでは、易しい単文で自分の意思を伝える練習をするのが、英訳(英会話)上達の秘訣だと思います。複文にするのは「単文だけでは詰まらない」と思うようになる時期まで待てばよいのです。

そのためには文章が余り長くなく、しかも内容に味のあるものを英訳してみるのが一番だと思います。単に「練習のための練習」ではなく、英訳する対象が面白く考えさせるものであれば、学習意欲も掻き立てられ、学習が持続できるからです。

私がイソップ物語を教材に選んだのも、このような意図があったからです。ではイソップ物語にはどのような「深さ」があるのでしょうか。イソップ物語は子どものための単なる「お説教話」「道徳物語」ではないのでしょうか。そこで最後に、この点を解明して第一部を終わりたいと思います。

それがイソップ物語を教材とした本書の第二部「実践編」の跳躍台になると思うからです。何とか頑張って最後の「補章」に挑戦していただけたら有り難いと思います。